

「ドイツ伝説集」における 伝説の文体的特徴と配列について

柳 泉

0. 問題提起

グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859) の『ドイツ伝説集』(Deutsche Sagen 1816/18) には、ホレおばさん (Frau Holle) ¹⁾ をモチーフとした伝説が5話収録されている。『グリム童話集』(Kinder- und Hausmärchen 1812/15) にも「ホレおばさん」(Frau Holle, KHM 24) ²⁾ という題名で童話が1話収録されている。

童話の文体分析をした Max Lüthi (1901-1991) によれば、本来ヨーロッパの童話には比喩表現、情景描写、心理描写はない³⁾。しかし、グリム童話にはこれらの描写がよく見られる。童話「ホレおばさん」も例外ではない。「ホレおばさん」に見られる比喩表現、情景描写、心理描写の例は次の通りである。引用中の下線部は今回も対象とする表現箇所であり、筆者によるものである。

- 1) 比喩表現: „Da schüttelte es den Baum, daß die Äpfel fielen, als regneten sie“ ⁴⁾
- 2) 情景描写: „Es verlor die Besinnung, und als es erwachte und wieder zu sich selber kam, war es auf einer schönen Wiese, wo die Sonne schien, und viel tausend Blumen standen.“ ⁵⁾
- 3) 心理描写: „Nun war es eine Zeitlang bei der Frau Holle, da ward es traurig und wußte anfangs selbst nicht, was ihm fehlte, endlich merkte es, daß es Heimweh war; ob es ihm hier gleich viel tausendmal besser als zu Haus, so hatte es doch ein Verlangen dahin.“ ⁶⁾

童話「ホレおばさん」では、上記引用箇所のように、雨という自然現象を用いた比喩表現、太陽と花による草原の情景があり、悲しみを感じるに至る心理状態を細かく描写している。このように、童話「ホレおばさん」はヨーロッパの童話には本来ないとされている比喩表現、情景描写、心理

描写を持ち、物語本来の時制である過去形で語られている。

童話にはこれらの描写がないことに加え、Lüthi は童話の特徴として、童話は「昔むかしあるところに」(es war einmal) という決まり文句で始まり、童話の舞台となっている場所や時代が特定されないことを指摘している⁷⁾。

そこで前回の『リュンコイス』第49号では、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写の有無に加えて4) 時制、5) 地名の有無、この5つの観点を中心に「ホレおばさん」をモチーフとした伝説と童話の文体的差異を考察した⁸⁾。その結果が次の表である。

	池 (DS4)	巡回 (DS5)	水浴び場 (DS6)	エックアルト (DS7)	農夫 (DS8)	ホレ (KHM24)
1) 比喩表現	—	—	—	—	—	○
2) 情景描写	—	—	—	—	—	○
3) 心理描写	—	—	—	○	○	○
4) 時制	現在形	現在形	現在形	過去形 + 現在形	過去形	過去形
5) 地名	○	—	○	○	—	—

「ホレおばさん」をモチーフとした伝説5話のうち、前半3話に共通している特徴は、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写がなく、4) 現在形で語られている点である。後半2話は、3) 心理描写があり、4) 物語の時制である過去形で語られている。

童話「ホレおばさん」の特徴は、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写があり、4) 過去形で語られ、5) 地名だけでなく時代も明示されていないことである。

ホレおばさんに関する伝説の5話のうち、後半2話が童話「ホレおばさん」の語りの特徴に近いことを確認した。そこから、同じモチーフを基にしたいくつかの伝説では、童話の文体的特徴に近い伝説ほど後半に配置されるのではないかと考えた。

本稿では、『ドイツ伝説集』に収録されている、同じモチーフを持つ伝説を対象とし、どのように配列されているかを上記5つの文体的特徴を手掛かりにして考察する。

1. 使用テキスト

調査対象とする『ドイツ伝説集』（Deutsche Sagen 1994）は、1816年に出版された初版第1巻と1818年に出版された初版第2巻を一冊にまとめたものである。『ドイツ伝説集』は、第3版まで刊行されているが、グリム兄弟の生前に出版されたのは初版のみであるため、前回同様、このテキストを使用する。『ドイツ伝説集』に収録されている、同じモチーフの伝説を選ぶ際に、植朗子（2013）⁹⁾ の分類を参考にした。前回の「ホレおばさん」モチーフの伝説が5話であったことから、同じモチーフの伝説が5話以上あるものを取り上げることにする。本稿で調査対象とした伝説とそのモチーフは次の通りである。モチーフは4つあり、順にM1からM4の番号を振っている¹⁰⁾。

M1 「女性の怪異体」5話

- 「よろず開きの眼」（DS 9 Die Springwurzel）¹¹⁾
- 「ボイネブルクの姫君たち」（DS 10 Fräulein Boyneburg）
- 「ピールベルク」（DS 11 Der Pielberg）
- 「城の乙女」（DS 12 Die Schloss Jungfrau）
- 「蛇娘」（DS 13 Die Schlangengjungfrau）

M2 「祝福・祝い・俗信」7話

- 「聖アンドレアス祭の前夜」（DS 114 Andreasnacht）
- 「食事に招かれた恋人」（DS 115 Der Liebhaber zum Essen eingeladen）
- 「降誕祭前夜」（DS 116 Die Christnacht）
- 「下着投げ」（DS 117 Das Hemdabwerfen）
- 「水晶玉占い」（DS 118 Krystalschauen）
- 「魔法の薬草を煎じる」（DS 119 Zauberkräuter kochen）
- 「ボンメルンの製塩夫」（DS 120 Der Salzknecht in Pommern）

M3 「巨人が存在した痕跡・証拠」7話

- 「巨人岩」（DS 134 Riesensteine）
- 「石に残る痕」（DS 135 Spuren im Stein）

- 「巨人の指」(DS 136 Der Riesenfinger)
「ウンタースベルクの巨人たち」(DS 137 Riesen aus Unterberge)
「ハイデルベルクのイエッタ丘」(DS 138 Der Jettenbüchel zu Heidelberg)
「巨人ハイム」(DS 139 Riese Haym)
「筆を垂らす肋骨」(DS 140 Der tropfende Rippe)

M4 「強い願い・呪い」7話

- 「乙女石」(DS 228 Der Jungferstein)
「石の新床」(DS 229 Das steinerne Brautbett)
「呪われて動けなくなった息子」(DS 230 Zum Stehen verwünscht)
「コルベックの農夫たち」(DS 231 Die Bauern zu Kolbeck)
「神聖な日曜日」(DS 232 Der heilige Sonntag)
「ヒュット小母」(DS 233 Frau Hütt)
「キンデルスベルク」(DS 234 Der Kindelsberg)

2. 伝説の文体的特徴

はじめに、5つの文体的特徴の有無を表にまとめて概観する。5つの文体的特徴の有無を概観するための表は、モチーフ別に作成し、表の見やすさのために、それぞれの題名を省略して表記した。『ドイツ伝説集』における当該作品の配列番号も付記した。1) 比喩表現, 2) 情景描写, 3) 心理描写はそれぞれ, 1) 比喩, 2) 情景, 3) 心理とした。時制に関しては、現在形, 現在完了形, 過去形のうち、同一作品内に2つ以上の時制が確認された場合、「混合」とし、単一の時制の場合はその時制を表記した。

M1 「女性の怪異体」5話

	よろず (DS9)	姫君 (DS10)	ピールベルク (DS11)	乙女 (DS12)	蛇娘 (DS13)
1) 比喩	—	—	—	—	—
2) 情景	—	—	—	—	—
3) 心理	○	○	—	—	○
4) 時制	混合	混合	現在形	現在形	混合
5) 地名	○	○	○	○	○

M2 「祝福・祝い・俗信」7話

	アンドレアス (DS114)	恋人 (DS115)	降誕祭 (DS116)	下着 (DS117)	水晶玉 (DS118)	薬草 (DS119)	製塩夫 (DS120)
1) 比喩	—	—	—	—	○	—	—
2) 情景	—	—	—	—	○	—	—
3) 心理	○	○	○	○	○	○	○
4) 時制	混合	混合	混合	過去形	過去形	混合	混合
5) 地名	○	○	○	○	—	○	○

M3 「巨人が存在した痕跡・証拠」7話

	巨人岩 (DS134)	痕 (DS135)	指 (DS136)	巨人たち (DS137)	イエッタ丘 (DS138)	ハイム (DS139)	肋骨 (DS140)
1) 比喩	○	—	—	—	—	—	—
2) 情景	—	—	—	—	—	—	—
3) 心理	○	—	○	—	○	—	—
4) 時制	混合	混合	混合	混合	混合	混合	現在形
5) 地名	○	○	○	○	○	○	○

M4 「強い願い・呪い」7話

	乙女石 (DS228)	新床 (DS229)	息子 (DS230)	農夫たち (DS231)	日曜日 (DS232)	小母 (DS233)	ベルク (DS234)
1) 比喩	—	—	—	—	—	○	○
2) 情景	—	○	—	—	—	○	—
3) 心理	—	○	○	○	○	○	○
4) 時制	混合	混合	混合	混合	混合	混合	混合
5) 地名	○	○	○	○	○	○	○

次に、モチーフによる4つのグループ内の伝説の配列を順に見ていく。

M1 「女性の怪異体」(5話)

1) 比喩表現, 2) 情景描写も, 3) 心理描写もなく現在形で語られている「ピールベルク」と「乙女」が後半の3話目と4話目に置かれている。

ここで扱われている5話の伝説の中で、童話の語り方から最も遠い語り方を持つと言えるこの2話の伝説は、1話目と2話目に置かれるはずである。この「女性の怪異体」にまつわる伝説に関しては、順を追うに従って童話の語りによくという配列ではないことが確認された。

M2「祝福・祝い・俗信」(7話)

ここでは、童話のように5) 地名がなく、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写があり、4) 過去形で語られている伝説「水晶玉」が7話中5話目に置かれている。童話の語りに近いこの伝説が最後に配置されていないことから、文体的特徴が考慮された配列ではないことが確認された。

M3「巨人が存在した痕跡・証拠」(7話)

配列の特徴として挙げられるのは、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写がなく、現在形で語られている「肋骨」が最後の7話目に置かれていることである。童話の語りとは異なる特徴を持つ「肋骨」が、最後に配置されていることから、童話の文体的特徴が考慮された配列ではないと言える。

M4「強い願い・呪い」(7話)

この中で童話の語りに近い伝説「小母」と「ベルク」が7話中6話目と7話目に配列されている。6話目の「小母」には1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写が見られたが、7話目の「ベルク」には1) 比喩表現と3) 心理描写だけである。「ベルク」にはない情景描写を持つ「小母」の方がより童話の語りに近いので、筆者の推測した配列の仕方であれば「小母」が7話目に配列されることになるが、6話目となっている。また、「新床」には2) 情景描写と3) 心理描写があり、過去形で語られており、この伝説も比較的童話の語りに近いので、後半に配列されることになると考えられるが、2話目に置かれている。

このように、4つのグループの伝説を、1) 比喩表現、2) 情景描写、3) 心理描写の有無、4) 時制、5) 地名の有無、5つの観点から概観し、その配列の仕方を確認したところ、M1 から M3 のグループでは、1) 比喩表現、

2) 情景描写, 3) 心理描写があり, 4) 過去形で語られ, 5) 地名がないというグリム童話の特徴を持つ伝説が, 最後に配置されていないことを確認した。M4 のグループでは, 童話の語り方に近い伝説が後半に置かれていることは確認されたが, 厳密な意味では童話の文体的特徴が意識された配列とは言えないことを確認した。どのような観点から伝説が配列されているのかを考察し直す必要がある。

3. 伝説の配列について

本論文で扱った伝説は全て 1816 年に出版された『ドイツ伝説集』上巻に収められている伝説である。グリム兄弟は『ドイツ伝説集』上巻の序文で, 伝説には, より強く歴史と結びついた伝説と, より強く土地に結びついた伝説があり, 前者を下巻に, 後者を上巻に収めたとしている¹²⁾。伝説は, 「表面的に似ているものは大抵同じところに並んでいる」¹³⁾。つまり, 同じモチーフの伝説は連続して収められているということである。

そこで, 同じモチーフの伝説を, その内容と主題に注目して見ていく。

M1 「女性の怪異体」のモチーフを持つ 5 話の伝説 (DS 9-13)

「よろず」DS 9: 羊飼いが山の中の王女のところへ行く話

「姫君」DS 10: 幽霊となった乙女のところへ羊飼いが来る話

「ピールベルク」DS 11: 火あぶりにされた乙女が昼間現れる山の話

「乙女」DS 12: 大きな鍵束を持った乙女が谷で水浴びをし, 山に帰る話

「蛇娘」DS 13: 仕立て屋の息子が, 洞穴に住んでいる魔法をかけられた娘のところへ行く話

DS 9 と DS 10 の共通点は「羊飼い」(DS9: Schäfermann, DS10: Schäfer) である。DS 10 から DS12 は, 「乙女」(DS10: die weiße Jungfrau, DS11: eine schöne Jungfrau, DS12: eine Jungfrau) でつながっている。DS 12 は, 「何人かの者が, この乙女の姿をはっきり見たと言っている」¹⁴⁾。という文章で終わっている。この文章は主張の wollen を用いた文章であるので, 信憑性があるとは言えない。一方, 次の DS 13 は, 「仕立て屋から直接話を聞いたと言う人々が今も生きている」¹⁵⁾ ことから, 信憑性がある伝説として語られている。

M2 「祝福・祝い・俗信」のモチーフを持つ7話の伝説 (DS 114-120)

「アンドレアス」DS 114: 聖アンドレアス祭の前夜に、将来の夫を知るための儀式をする娘の話

「恋人」DS 115: 降誕祭の前夜に、思いを寄せる男性を魔術で呼び出す話

「降誕祭」DS 116: 降誕祭の前夜に、恋人を呪文で呼び出す娘の話

「下着」DS 117: 降誕祭の前夜に、将来の恋人を見るための儀式をする娘たちの話

「水晶玉」DS 118: 未来を映し出す水晶玉で、恋人との将来を見た娘の話

「薬草」DS 119: 老婆からもらった薬草で、離れて行った恋人を取り戻した女の話

「製塩夫」DS 120: 家を出て行った夫を、黒山羊を使って家に戻した魔術師の話

DS 114 から DS 117 の4話は、お祭り (DS114: die Andreasnacht, DS115: die heilige Christnacht, DS116: der heilige Abend, DS117: der Weihnachtsabend) の前夜に行う儀式に関する伝説である。いずれも現在、あるいは未来の恋人に関する儀式である。この4話の伝説の後に、魔術的な儀式を題材にしたDS 118が続く。この儀式に使用する水晶玉 (Krystall) は老婆 (ein altes Weib) が持っている物で、老婆と魔術が、次のDS 119とDS 120に共通している。DS119に登場する女に薬草を渡したのは老婆 (ein altes Weib) であり、DS120の魔術師 (eine Zauberin) も老婆 (ein altes Weib) である。

M3 「巨人が存在した痕跡・証拠」のモチーフ7話 (DS 134-140)

「巨人岩」DS 134: 軍刀で切りつけたような痕がある石の話

「痕」DS 135: 足型と手型の付いた石の話

「指」DS 136: 巨人の指と言い伝えのあるハウスベルク山頂の塔の話

「巨人たち」DS 137: 住民に忠告をするウンターズベルクの巨人の話

「イエッタ丘」DS 138: ハイデルベルクのイエッタが丘に礼拝堂を建てた老女イエッタの話

「ハイム」DS 139: キリスト教に改宗し、修道院を建てた巨人ハイムの話

「肋骨」DS 140: 教会の天井にかかっている巨大な肋骨の話

DS134 から DS137 の 4 話は、巨人にまつわる伝説である。そのうち最初の 2 話 DS 134 と DS 135 は、何かの痕が付いている石に関する伝説である。DS 135 の手 (Hand) から DS 136 の小指 (der kleine Finger) へとつながっている。DS136 と DS137 はどちらも巨人 (Riese/n) の伝説である。DS 137 と DS 138 の共通点は、「ベルク」(DS137: Unterberg, DS138: Heidelberg) である。DS 138 に登場するイエッタは、礼拝堂 (Kapelle) をハイデルベルクに建て、ガイスベルク (Geißberg) の麓にある泉の水を飲みに行く。礼拝堂は、DS 139 の修道院 (Kloster) と DS 140 の教会 (Kirche) につながっている。

M4 「強い願い・呪い」をモチーフとした伝説 7 話 (DS 228-234)

「乙女石」DS 228: マイセンの城塞の近くにある乙女石と呼ばれる石の話

「新床」DS 229: 恋人との結婚を反対された娘が石のベッドで衰弱死する話

「息子」DS 230: 父親の言うことに従わなかった息子が呪われて動けなくなったが、神を心から信じて救われる話

「農夫たち」DS 231: コルベックの教会にある石の話

「日曜日」DS 232: 日曜日に働いた糸紡ぎ女と農夫の話

「小母」DS 233: 石になった巨人の女王ヒュット小母と泥だらけになった息子の話

「ベルク」DS 234: ヴェストファーレンの騎士と石の話

DS 228 と DS 229 は、石 (DS228: Jungferstein, DS229: das steinerne Brautbett) にまつわる伝説である。DS 229 と DS 230 のつながりは、母親から呪われて石のベッドに座ったままの娘 (DS229) と父親から呪われて動けなくなった息子 (DS230) である。DS 230 の呪われた息子は、神を信じることによって救われる。以降、DS 234 まではキリスト教が下地となっている。クリスマスの夜と教会の庭 (DS231: Christnacht, Kirchhof), 安息日 (DS232: der heilige Sonntag), パンのかけら (DS233: Brosame), 神を信じる者と信じない者 (DS234) である。DS 234 には話の終わりに石 (ein großer Stein) が登場し、はじめの石にまつわる伝説への循環が見られる。

M1 から M4 における伝説の配列を見ていくと、石、巨人、キリスト教

という小さなモチーフとも言えるものが、次の伝説にも登場している。『ドイツ伝説集』では、同じモチーフを持つ伝説がまとまって配置され、その中で個々の伝説は、それが持つ小さな要素によって配列されているのではないか。

4. 結論

本稿で調査対象とした伝説は、『ドイツ伝説集』に収録されている、同じモチーフを持つ伝説である。グリム童話のように、比喩表現、情景描写、心理描写があり、過去形で、地名は明記されない、という文体的特徴を持った伝説が、同じモチーフを基にした伝説の中で最後に置かれているかどうかを検証した。その結果、伝説の配列は、そのような文体的特徴によるものではないということが明らかになった。

『ドイツ伝説集』下巻の序文には、「下巻の伝説の配列は、上巻のように偶然の手に委ねるわけにはいかなかった」¹⁶⁾と述べられており、今回対象とした上巻の土地伝説の配列は、偶然によるものであると示唆されている。

そこで、対象とした伝説の主題に焦点を当ててみると、前に置かれている伝説との関連が確認された。前に置かれた伝説に導かれて次の伝説が配置され、さらに次の伝説へとつながっていくのである。伝説の配列について、『ドイツ伝説集』上巻序文では次のように述べられている。

„Jedwede Sage stehet vielmehr geschlossen für sie da, und hat mit der vorausgehenden und nachfolgenden eigentlich nichts zu tun“¹⁷⁾

序文では、このように「前後の伝説とは本来何の関係もない」と述べられている。しかし、調査対象とした伝説は、いずれも前に置かれた伝説との関連性が認められた。このことから、同じモチーフを持つ伝説は、意図的に配列されていると考えられる。

注

- 1) ホッレ小母 (Frau Holle) もしくはホッラ小母 (Frau Holla) として伝説に登場する。グリム童話の「ホレおばさん」(Frau Holle) のことであり、ここ

- では伝説の方も、「ホレおばさん」と呼ぶ。
- 2) KHM は Kinder- und Hausmärchen の略で、番号は収録されている順を表す。
 - 3) Lüthi, S. 13-36.
 - 4) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Erster Band. S. 169.
 - 5) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Erster Band. S. 169. 文中の „standen“ は、第3版では „waren“ であった。
 - 6) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Erster Band. S. 169. この引用箇所も第3版から第7版の間に内面描写が書き加えられ、主人公の心の動きが細かく描写されている。
 - 7) Lüthi, S. 34.
 - 8) 柳泉：グリムの『ホレおばさん』伝説と童話の文体的差異について 『リュンコイス』第49号 2015年 33-46頁
 - 9) 植, 31-37頁
 - 10) M は Motiv の頭文字による。番号は『ドイツ伝説集』に収録されている順番によるものである。
 - 11) DS とは、Deutsche Sagen の略で、数字は通し番号を示している。個々の伝説のタイトルに関しては、翻訳に従った。
 - 12) Deutsche Sagen, S. 17f.
 - 13) Deutsche Sagen, S. 19.
 - 14) „Einige wollen sie genau gesehen und betrachtet haben.“ Deutsche Sagen, S. 46.
 - 15) „es gibt noch die Leute, die aus seinem Munde gehört haben.“ Deutsche Sagen, S. 47.
 - 16) Deutsche Sagen, S. 389.
 - 17) Deutsche Sagen, S. 17.

使用テキスト

Deutsche Sagen herausgegeben von den Brüdern Grimm. Ausgabe auf der Grundlage der ersten Auflage. Ediert und kommentiert von Heinz Rölleke. Frankfurt am Main 1994. (桜沢正勝, 鍛治哲郎訳: ドイツ伝説集 上下巻 人文書院 1987, 1990.)

Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Erster Band. Frankfurt

am Main 1984.

参考文献

Helbig/Buscha: Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht.
Leipzig 1991.

Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Auflage. Bern 1960.

Wilpert, Gero von: Sachwörterbuch der Literatur. 8. Auflage. Stuttgart 2001.

植朗子：『ドイツ伝説集』のコスモロジー 配列－モチーフ－エレメント 鳥影
社 2013年

柳泉：グリムの「ホレおばさん」伝説と童話の文体的差異について 『リユンコ
イス』第49号 2015年 33-46頁